

子どもと本と私

・ ・ 俵万智さんの母親ぶり ・ ・

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問 教育アドバイザー

張江 幸男

滞在期間の長短にかかわらず、海外に住む子ども達への日本語の教育は保護者にとって大きな問題です。このコラムでは、海外・帰国子女教育の大ベテランが「海外での日本語教育」へのアドバイスを語ります。

仕事帰りに、よく東京駅丸の内北口の紀ノ国屋書店にいく。ゆっくり見て歩く時間が至福のときだ。「かーかん、はあい」という変わった書名が目にとびこんできた。以前から俵さんの短歌が大好きだったので、思わず手にとって見た。母親の俵さんとそのお子さんとの毎日の生活。そこに「本」が介在してくる。皆さんも体験しているごく普通の日常生活のなかでの喜怒哀楽。そこに本をからめて客観的にきりとる文。これが歌人俵万智のきらめく才能なんですね。皆さんも、「うーん、あるある」とか。「そうなんだよね」とか。「オドロキなんですよ」などと口走るにちがいない。抜粋してお届けします。

1、園バスを待ちながら・・「すーびょーるーみゆー」

この本は、不可解な言葉が並んでいる。しかし、声に出して読んでみると心地よくなる。親子で口ずさむと安心して時間をすごせる。この本なら、園バスがきたとき「ぞーべーりーゆー、のーりーたーまーえー」お経を唱えるように送り出せる。伸縮自在の本なのだ。

振り向かぬ子を見送り

振りぬいた 時に振る手を用意しながら

2、はじめての折り紙・・「折り紙しよう」

俵さんも息子さんも、どうやら不器用な人らしい。俵さんが折り紙の本買い与えても、気に入ったものがあると「これつくって!」と千代紙を持ってくるのが常だった。

ところが、冬休みに、親戚の家に子連れで遊びに行った、息子と似た年の子どもたちがいたからだ。子ども中心に、その親、そのまた親も加わって、盛大な折り紙大会になってしまった。世代や、育ったところによって、定番がそれぞれ違っているの、異様に盛り上がったらしい。息子さんはこのあと、自分で折り紙に興味を示し、万智子さんに折り紙の製作を教えて欲しいとねだるようになった。

折り紙の本は沢山出ているが、『おりがみしようよ』をすすめている。それは、折り方の説明が分かりやすいこと。内容も動物、遊び、役立つもの・・・・・・などバラエティに富んでいるからだ。難しさのレベルが示されているのも親切だという。

今、息子さんがはまっているのは「切り紙」なのだそう。三角、また三角と折ったところにハサミを入れる。これを開くと花のような雪の結晶になる。これが面白くて、せっせとハサミを動かしている。夢中になって黙々と切っている。当然、後始末に俵さんは振り回される。掃いても掃いても、何処からともなく綺麗な紙片が出てくるのだ。

一人遊びしつつ時折我を見る

いつでもいるよ大丈夫だよ

3、ドラえもんの国旗の旅へ

・ ・ 『ドラえもん世界の国旗百科全書』

マンガの本の読み聞かせにも工夫が必要らしい。マンガはほとんどセリフでできている。はじめは俵さんも、声優になったつもりで、登場人物の気分で、声を調節して読んでやった。しかし、どうも乗ってこない、よく息子さんの表情をみていると、いま、どこなのか伝わっていないらしい。そこで今このコマなのか指さして「ここを読んでいるからね。そのときは、この絵を見るんだよ。次はその下にいくからね」という指導が絶対必要なのだという。

が、マンガの文法に慣れてしまうと「自分で読む」と言い出す。このような状態のとき叔母さんがプレゼントしてくれた本が『ドラえもん世界の国旗全書』だった。

内容は美しい国旗とともに、その国の簡単な紹介や、国旗の由来がのべられている。ドラえもんたちが、世界の国々旅するマンガが理解を助け、また地球が今抱えている問題（戦争、温暖化、人種差別など）をコラムとして分かりやすく書いている。俵さんがショックを受けたのは、多くの国旗の赤色が、国のために流された人々の「血」を意味していることだったという。このことは、絵本を与える親たちに、大きな衝撃を与えるかもしれません。それにしても、ドラえもんに導かれ、ますます子どもたちは国旗を好きになる。たぶん、オリンピックが開かれると、子どもたちはこの本で一生懸命調べるでしょうね。

ドラえもんのいないのび太と思うとき

贈りたし君に夢の木の実